

「いやひこの たかねの雲の 輝やかに 古志の国はら よはあけむとす」 御風



この歌は昭和 53 年（1978）弥彦総合文化会館建設の際、西蒲原の旧家所蔵の遺墨をもとに大ホールの<sup>どんちょう</sup>緞帳に織り込まれました。緞帳は京都の老舗川島織物で制作され、歌の背景には弥彦山に照り映える朝の陽光の美しさと、越後の文化が弥彦を中心に開けていく様子がデザインされています。

相馬御風は明治 16 年（1883）糸魚川町（現糸魚川市）に生まれ、早稲田大学卒業後、三木露風・野口雨情らと早稲田詩社を創設し、口語自由詩を提唱し活動していました。しかしながら、大正 5 年（1916）突然故郷の糸魚川に戻り、その後は終生そこで暮らしました。

御風は詩・歌人としてよく知られていますが、特に郷土の偉人良寛の研究にも没頭し、良寛の遺跡を辿って五合庵や旧和島村の木村家などを訪ねたり弥彦にも幾度か訪れています。最初に弥彦を訪れたのは彌彦神社再建の翌大正 6 年 7 月のことで、大正 8 年と昭和 6 年にも訪れた記録があります。このほか列車で弥彦を通過した際にも短歌を詠んでいますが、昭和 7 年に夫人を亡くした以後は遠方へ出かけることがほとんどなくなったといえます。

巻頭の歌は制作年がはっきりしていませんが、昭和 8 年（1933）7 月にみのや旅館が発行したパンフレット『弥彦』（みのや旅館当主白崎弥平編著）に初めて登場します。おそらくこの歌の原型と思われる「いやひこの 高嶺の雲の やすらけく 越の国原 夜はあけむとす」という御風自筆の軸が彌彦神社に奉納されていることから、「やすらけく」の歌が推敲を重ねた末、昭和の初め頃に「輝かに」の形で完成したものと推測されています。

また、御風は頼まれると県内各地の民謡や小唄、学校の校歌などの作詞も気さくに応じたといえます。例えば上記『弥彦』に載せられている小唄「弥彦」は白崎弥平が昭和 5 年に依頼したものといわれ「…伊夜日子の高嶺の雲の輝やかにかざやく神の…」という一節がよまれています。これらを見ると御風の弥彦に対する想いは霊峰弥彦山と朝雲の輝きに寄せられているように思います。

御風は昭和 25 年（1950）5 月、67 才で歿し、糸魚川市清崎の相馬家墓地で眠っています。

（参考：小杉正男氏村史原稿「相馬御風」）